

## 東北大学関東良陵同窓会

### 平成二十四年関東連合会総会開催 新会長並びに幹事長、幹事、監事決定される

平成二十四年関東良陵同窓会（正式には、東北大学良陵同窓会関東連合会）は、平成二十四年六月十六日（土）東京・市ヶ谷アルカディアで開催された。

総会開催前の午後二時から、同会場で押田茂實先生のお世話で、関東良陵アカデミアが開催され、新任教授の自治医大埼玉医療センター外科、力山敏樹教授の「消化器外科のトップランナーと地域医療の融合を目指して」と題して、最先端の肝胆膵外科の魅力的な講演があった。その後、首都圏大学の情報交換があり有意義な会となった。

総会は、午後四時三十分から始まり、高橋会長挨拶、次いで各部会報告、会計報告、女医部会報告等があり、引き続き新役員の選出（詳細は本紙二面に掲載）が行われた。二〇〇一年から会長を務めた高橋会長は、本年四月に京都に戻ったので、その後任として、本年四月十日の役員会では、現副会長の押田茂實先生が推挙され、総会でも満場一致で押田茂實先生が次期会長に決定した。また、新役員も役員会で推薦した原案通り（役員名簿本紙二面掲載）に決定した。

午後五時から特別講演として、現・高橋会長による

「渡り鳥人生―いつもゼロからの出発」が行われた。同会長は、東北大学卒業（昭和34）卒業後、米国、京都、秋田、京都、東京とまさに七転び八起き人生、いつもゼロからの出発であったが、与えられた場所で全力を尽くし、その場の最高峰である日本外科学会会長、日本癌学会会長を務めた話や、全国初の専門医養成組織・東京アカデミーの話に会員一同が多大の興味を示された。

午後六時から懇親会に移り、歓談の後、例年の如く根本先生のお世話でアフターディナーコンサート（ベヴェトリーチ・カントノー）音大同級生美女六名による素晴らしい歌声に酔いしれた。

最後に、恒例の「荒城の月」を九十三歳になられた、神津先生（昭和19卒・本会顧問）が美女らと共に力強く歌い、満場の拍手喝采を浴びた。

最後の締め挨拶は、今回副会長に選ばれた飯野正光（昭和51卒）東京大学教授が行い、その中で今回は九十歳を越えられた昭和十九年卒の飯島、神津、浦本先生らが、「ご出席頂き本当に有難いことであると述べられた。それに比べて若い会員の出席が少ないのは残念であり、今回の特別講演や新任教授の話は、若い人にこそ聞いて欲しかった。来年からはそのような努力をしたいと述べられ会を締めくくった。

（文責 高橋俊雄）

#### \*会費納入のお願い

今年度年会費 三千元を同封の払込票にて、ご納入ください  
さいますようお願い申し上げます。

# 関東良陵だより

# 関東良陵役員会開催

関東良陵役員会は、平成二十四年九月二十七日（木）午後七時より、市ヶ谷アルカディアにて開かれた。

去る六月十六日（土）に開催された総会の決定事項により、新会長を初めとする役員の新職（以下に掲載）の確認と引き継ぎが行われ、前会長の高橋俊雄先生より、「挨拶があり、次いで新会長に就任した押田茂實先生から次のような所感が述べられた。

本会の今後の運営については、先輩の諸先生が築かれた伝統を重んじ、ご相談をさせて頂きながら、良陵会の発展に微力を尽くしたく思う。

特に若手の総会等への参加を推進して、会の構成層をさらに広げて行きたいと思う。

アカデミアについては、副会長にご就任頂いた飯野正光先生と共に考えて行きたい。

その後、役員会の各議題の討論に入り議事進行して終了した。

## 関東良陵会・新役員の名簿

会長	押田茂實（昭和42）	幹事	横山和仁（昭和53）
副会長	飯野正光（昭和51）	同	清沢源弘（昭和53）
幹事長	岩瀬光（昭和59）	同	平田欽也（昭和58）
監事	新田澄郎（昭和35）	同	安田宏（昭和59）
常任幹事	根本宏（昭和41）	同	内田研一（昭和60）
同	庶務・編集担当	同	小林浩一（昭和61）
同	田中佐喜子（昭和43）	同	須納瀬弘（昭和63）
同	女医部会担当	同	高野英昭（平成1）
同	坂間晃（昭和43）	同	金谷幸一（平成5）
顧問	神津康雄（昭和19）	同	出口智基（平成19）
同	信田重光（昭和29）		
同	小山田日吉丸（昭和30）		
同	猪狩正昭（昭和30）		
同	近藤正太郎（昭和33）		
同	高橋俊雄（昭和34）		
同	黒木登志夫（昭和35）		
同	荒井他嘉司（昭和36）		
幹事	林泉（昭和41）		
同	広瀬陽子（昭和43）		
同	細谷彬（昭和45）		
同	村井善郎（昭和46）		
同	大貫恭正（昭和50）		

### アフターティナーコンサート所感

去る六月十六日（土）の総会に出演した女性ボーカルグループ「ベヴィトリィ・チ・カンタノー」は、出席した会員の皆さんから絶賛された。まず、出演した六名の女性シンガーたちの清潔感と若さに溢れた華麗さに目を奪われた。

次いで演目が多様であった。オペラの曲「ルサルカ」から「白銀の月よ」、「トゥランドット」よりの「誰も寝てはならぬ」を初めとして馴染みの深いミュージカル「マイフェアレディ」の「踊り明かそう」、「サウンドオブミュージック」より「ドレミの歌」等。そして最後には、心の琴線に響く、「ふるさとの四季」のテーマ。この日本の歌のメドレーは皆さんの心を郷愁に誘った。満場の拍手がいつまでも耳に残った。（T）

## 東北大学校友会

昭和二十四年関東交流会  
について

信田重光（昭二九）

頭書の会合が平成二十四年七月二十九日（日）午後三時よりサピア・タワー五階の東京ステーション・コンファレンスにおいて開催された。

この会はこれまでの全学同窓会が大学同窓会が中心であったものを、開学百周年を機会に前記の名称に変更し、更に会員を卒業生、在校生の家族、在校生、高校生、一般に拡大したものである。

今回は約四百余名が参加したが、このうち四分の一強の百余名が卒業生・在校生の家族によって占められていた由である。

最初に本年就任の里見 進 総長（前大病院長）の挨拶があ

り、東北大学の建学の精神「研究第一主義」、「門戸開放」、「実学尊重」、の理念のもとに多くの優秀な人材を輩出してきたが、

「大学ランキング」で「総合評

価」が八年連続して第一位、「進学して伸びた」が六年連続して

第一位の実績をもとに、特に人材育成について諸外国の研究者

と対等に議論する語学力とコミュニケーション能力を身につけた

「国際的に通用する人材」の育成に最優先で取り組むこと、また、特に昨年三月の東日本大災害に対して災害復興新生研究機構として「東北大学災害科学国際研究所」(IRiDeS)を設立、大

災害の経験を生かして、自然災害対策、危機対応策などを自然

災害科学として研究し、広域巨大災害への新たな備えのパラダイムを作り、その知識を社会に還元する「実践的防災学」を研

究する世界的災害科学の研究拠点とする等の大学の方針を述べられた。

次いで講演会に移り、災害科学国際研究所所長の平川 新教授（専門歴史学）の「歴史資料のレスキューと災害科学」と題して、古書の収集が過去数百年の災害の記録として極めて重要で、大災害の起こる前にそれらを収集保管し分析することの重要性を強調された。次いで加齢医学研究所の川島隆太教授の「スマート・エイジング―脳を

知り脳を鍛える」では種々の思考に脳のどの部分が関連するかを脳電流で計測して分析、固定し、脳を鍛えることの重要性を強調されたが、朝飯でコメを食べる子供はパン食の子より脳の働きが強くなるのお話では、会場から明るい笑いが湧き起り、極めて有益な講演であった。

た。講演会終了後、懇親会に移り、関東支部長神津康雄先生より、世界に冠たる東北大学の卒業生である喜びを述べた挨拶があり、各学部同士、また他学部同士、東北大学農学部産のビール、酒、ワイン等を酌み交わしながら懇親の度を深めていき、午後七時散会した。

なお、本年のホーム・カミング・デイは、十月六日仙台で行われる由で、多くの同窓会員の参加が要望された。

（文責 信田重光 本会顧問）

「関東良陵だより」への情報提供のお願い

会員各位の本紙への情報（教授就任、叙勲、新規開業、就職希望、移動、近況、その他）を募集しております。東北大学良陵同窓会関東連合会東京支部（四頁に記載）まで情報をお寄せ下さい。

世にも珍しいおはなし  
四年間に三回も入学試験を  
受けた世代について

小山田日吉丸  
(昭和三十年卒)

先日の役員会(平成二十四年九月二十七日開催)の席でそろそろ議題も尽きた頃、神津先生から寮歌祭の復活に絡んで旧制高等学校の話が出ました。

その時私が出席の皆さんを見回しながら、「この中で旧制高等学校の生活を経験しているのは神津先生のほかには私の隣の席の猪狩先生の肩をたたきながらこの猪狩先生と私だけのようにですね」という話を出し、それに続いて「私たちの学年は四年間に三回も入学試験を受けたのです」と発言したところ、出席の皆さんは大変驚いておられました。私はもう八十一歳、ニキビ面の頃のことですので、それはそれは遠い遠い昔のこと、皆さんは全くご存じないのは当然のことでしたでしょう。

そんなこともあつてか、そのすぐ後に幹事の方から「今の話を是非『だより』に投稿して欲しい」との「要望」がありました。

これはとんだことになってしまったわいと思いましたが、後の祭り、その場の雰囲気、簡単に飲み込まれて、とつとつお引き受けするはめにな

ってしまいました。そのようなわけでこの度は、世にも珍しい昔々のおはなしをここに伝えさせて戴きましよう。

私は新潟県の高田市(現上越市)で生まれ、そこで育ちました。終戦は今で言う旧制中学校(新潟県立高田中学校)の三年生の夏でした。終戦間際の私たち三年生は、来る日も来る日も勤労動員に駆り出され、一学年は五クラスありましたので、そのひとクラスずつが順番に、月曜から金曜まで一週間に一回登校して授業を受けるという状態が続いておりました。

そして終戦。その後はいろいろな制度がどんどん変えられて行きました。が、学校制度も例外ではありませんでした。いつの頃から六・三・三制が話題になったかははっきり思い出せませんが、従来の高等学校(今でいう旧制高等学校)も消滅してしまうような話は確かに出てはいました。そうなる、その当時の小学校六年、中学校五年、高等学校三年(他に高等専門学校もあり)、大学三年という方式は根本から崩れることになりました。しかし、私が中学五年生になった頃はまだ新方式に移行する所まではいっておらず、従来のように高等学校の受験は出来たような次第でした。私は昭和二十三年の三月に中学五年を終了、卒業しましたが、その直前に受験した今で言う旧制富山高等学校に合格しておりました。因みに、私

が卒業したあと、新潟県立高田中学校はそのまま新制高等学校となり、卒業せずに残った同期生はそのまま新制高等学校の三年生に進級となりました。従来の四年生が新制度では一年生というわけです。

昭和二十三年四月に初めて親元を離れ、富山駅から富山海線で蓮町という駅で降りた所にある高等学校の敷地内の寮に入れて戴き、そこでの生活がはじまりました。当時は住宅難に加えて大変な食糧難だったものですから、六畳ひと間に同級生三人という生活を送りながら、時どき連れ立っては近くの農家を回り、芋などを売ってもらっておりました。そのような寮生活の中にあつて、身近の仲間では私が一番郷里に近いこともあり、三週間に一回くらいは頻度で週末に帰郷しては味噌や米を担いで寮に戻って来ました。そうすると、仲間が一斉に私たちの部屋に集まり、ある時などは洗面器に米を入れて火に掛けたこともありました。その時はまだ煮え切らないのにみんな争ってスプーンで掬って食べたという浅ましい思い出もあります。

(以下次号 筆者は本会顧問)

\*郷愁に満ちた楽しいお話が佳境に入りましたが、紙面の都合により、この続きは執筆の先生の「了解を得ましたので次号に続いて掲載させていただきますのでご了承をお願いいたします。

## 女医部会開催の報告

生憎の雨模様でしたが、前年度は東日本大震災の年で中止となつてしまつた、第十四回女医部会は、平成二十四年七月七日(土)午後五時から同八時まで日本橋三越七階(ホテルオークラ)で開催されました。

ご参加の方は十四名で、灰田美知子先生(昭和五〇年卒、現半蔵門病院副院長)による「慢性咳嗽について」のご講演をしていただきました。

ご講演の主な内容は、咳嗽診療の原則、特に注意すべき、胃・食道逆流による咳嗽の注意点などでした。

灰田先生の内容の濃い有意義なご講演の後には、美味しいホテルオークラの料理をいただきながら、それぞれの近況の話し合いに花が咲き、和氣藹藹とした楽しい三時間余を過ごし閉会となりました。(田中佐喜子)

## 東北大学良陵同窓会

関東連合会東京支部

〒247-0072

神奈川県鎌倉市岡本

TEL & FAX 二・二・一・七〇四

〇四六七(四五)〇二八七